

5/19(火)、「チャペル・アワー」

聖書箇所:「新約聖書、ルカによる福音書 6 章 6 節〜11 節」

本日のチャペルには「群馬ダルク」さんから、平山晶一さん、福島ショーンさんの2名をお招きしました。ダルクとは、Drug (薬物)、Addiction(病的依存)、Rehabilitation(回復)、Center(施設)の頭文字 DARC を組み合わせた造語です。薬物依存症はもちろん、様々な依存症やそれに類する問題でお困りの方々が回復するための支援を実施している施設です。施設で働く方々の多くは、依存症患者として入所し、その後に回復をした方々です。今回お招きしたお二人も依存症の経験をお持ちで、克服した現在は入所者と共同生活をしながら回復の支援をなさっています。新短での講演は今回で3回目です。20歳前後の若者向けに、ただ単に「危険だ!」というだけでなく、「どのようなプロセスで依存症になってしまうのか、なぜそこからは抜け出しにくいのか」ということを、より心情的に語っていただきました。

平山晶一さんの薬物依存のキッカケは、高校生時代、友人に勧められて気軽に試したある市販薬でした。最初は好奇心から試したのですが、強い依存性は感じられませんでした。「これなら、やめなくなったらやめれば良い」くらいに感じていました。それよりも、やめることによって仲間を無くすことが怖かったのです。日を追って、薬の量は増え、学業はおろそかになり、欠席することが増えて行きました。すると今度は、現実の自分を直視するのが怖くなり、そうした状況から現実逃避のために、ますます薬物を止められなくなってしまったのです。

当然、購入費用の問題もあり、あちこちからお金を工面し、盗みを働くなど犯罪に手を染めてしまいました。警察の世話になることもあり、保護者を悲しませることは充分に分かっていて、その時はやめようと決心するのですが、やめられないのです。頭では、「これは良くないことだ、やめなければならぬ」と分かっている、自分ではどうにもならなくなってしまうのです。精神的にも追い詰められ、自殺を考えたことも何度もあったそうです。

福島ショーンさんは、プロスポーツ選手を志すほどスポーツに秀でていました。学習に関しても、米国の有名大学に進学するほどで、いわゆる優秀なアスリートでした。一般に「薬物依存になる人は、目標もなく生きていて意志の弱い人」などと思われていることが多いです。しかし、依存症は学業成績や競技成績とは関係ありません。ショーンさんが薬物を始めたキッカケは、競技力の向上や疲労回復などでした。そのこと自体はスポーツ選手として前向きと言えなくもないものだったかも知れません。しかし、結果的には依存症になり、犯罪に手を染め、競技を諦めざるを得ない状況になってしまったのです。

どちらの方も、そんな経験を経て「ダルク」の存在を知り、入所したのだそうです。ダルクの仲間には、回復の辛さを知る先輩も多く、向かうべき先を示してくれたり、背中を押してくれたり、側面から支援をしてくれるなど、寄り添って共に歩んでくれたそうです。薬物依存になる人が全くなければ、こうした施設はいりません。しかし、それは理想論です。薬物依存からの回復率は40%程度と言われています。そして、依存症に悩む方々は、覚醒剤や大麻のような「麻薬」と呼ばれるものより、市販薬や、病院処方薬やお酒、が原因のことの方が多く、身近な問題なのです。

お二人の話からは、薬物依存になるキッカケはどこにでもあり、誰もがそうなる可能性を持っていることが感じられました。現在はネット環境等から気軽に多くの情報が手に入ります。誘惑も多いです。友達を失いたくない気持ちから取っていた行動が、かえって友達を失う経験になる事や、軽い気持ちから始めた薬物は体や心を壊すことはもちろん、家族やその未来をも壊してしまう可能性もあるのです。

お二人は経験者として、「誘惑やしがらみとは、あらがわずに逃げる、そして、本音を言い合える人を持っていて、怖がらずに相談することが重要」と語りました。今日のお話は、言うなれば自らの失敗や犯した罪を正直に告白するもので、講演者は非常に辛かったと思います。しかし、苦難を乗り越えた今、現在の歩みは、多くの苦しみをかかえた人に寄り添うものでした。これはまさに「悔い改め」であり、これはキリスト教的にも重要なテーマだと思います。本日は貴重なお話をありがとうございました。